AO 入学者が過ごした 4 年間

― T 大学 AO 入学者全員面接調査（1 期生 4 年分）から ―

福島真司（山形大学），清水克哉（鳥取大学）

T 大学入学センターでは，平成 16 年度入試において AO 入試を導入して以来，各年度末に，全ての AO 入学者を対象とした面接調査を実施してきた。AO 入学者の入学後フォローアップが主な目的であるが，AO 入学者の学生生活の実態や諸満足度も併せてインタビューしている。この調査結果から，AO 入学者の「大学の総合的な満足度」や「授業への満足度」は，学部によりばらつきはあるものの，概ね高い満足を示しており，かつ，学年が上がるにつれてさらに満足度が高まる傾向にあることがわかった。また，AO 入試制度については，ほとんどの AO 入学者が存在価値を高く評価しながらも，制度設計について，改善点もあると感じていることがわかった。

1 はじめに

T 大学[1]入学センターでは，平成 16 年度入試で AO 入試を導入して以来，入学前教育合宿の実施，AO 入学者同士の学年を超えた定期的な懇親会の実施，各種イベント時期でのメール等による頻繁な連絡，各年度末の面接等，複数のチャネルを用い，学生生活の時々のフェーズにおいて，AO 入学者と密なコンタクトを図ってきた。AO 入学者の入学後のフォローアップが中心的な目的ではあるが，特に毎年度末実施する「AO 入学者全員面接調査」では，GPA 等の成績追跡調査では決してわからない AO 入学者の大学生活の実態や，大学生活の諸満足度，入学前の期待と入学後のギャップ，大学に改善して欲しい点等について，詳しくヒアリングしている。福島(2007)では，AO 入学 1 期生の 2 年分について，また，AO 入学者 1 期生と 2 期生との比較を中心に，調査結果を報告した。

本稿は，福島（2007）に引き続き，T 大学 AO 入学者全員面接調査について報告するものである。1 期生のみにフォーカスし，AO 入試で入学し，4 年間の学生生活を送った AO 入学者の学生生活やその満足度，AO 入学者側から見た T 大学 AO 入試制度への評価について述べる。

2 調査概要

2.1 調査期間

調査は，各年度末の定期試験が終了した後の 2 月～3 月にかけて実施した。すなわち，第 1 回目の調査である AO 入学者 1 期生 1 年次の調査は 2005 年 2 月～3 月に実施し，最終第 4 回目の調査である AO 入学者 1 期生 4 年次の調査は，2008 年 2 月～3 月にかけて実施した。

なお，最終調査である 4 年次の調査については，卒業論文提出後の卒業を間近に控えた春期休業中の時期であることが理由で，実際に面接することが不可能な者も存在した。その場合は，あらかじめ 15 分～30 分程度の時間を空けてもらうというアポイントメントを取った上で，電話によるインタビューを行い，可能な限り全数調査に近づけるよう努力した[2]。電話インタビューについては，2008 年 2

月27日～3月17日の間に，適宜実施した。

2.2 調査対象者

調査対象者は，T大学AO入学者1期生（以下，AO1期生）のうち，1学科のAO1期生を除く全員である[3]。該当するAO1期生は40名であるが，あくまで自由意志での調査協力を呼びかけるインタビューであったこと等が理由で，最終的に1期生37名からの回答を分析対象とした[4]。調査対象者の概要は，表1の通りである[5]。

表1　分析対象とした調査対象者の概要

(人)

	A学部	B学部	C学部	合計
AO入学者1期生	16	17	4	37

2.3 調査方法

調査は，調査者を1名に固定し，原則として，面接により実施した。先述した理由で，一部（5名）については電話によるインタビュー調査にて代替した。調査は，あらかじめ調査票を用意した上で，実施した。自由に回答を求める質問形式が多かったため，調査時間は最短で一人約15分間，最長で一人約100分間程度を要した。

3 調査結果とその考察

本稿では，調査結果の中で，次の質問項目について報告する。

- ○ 大学生活等満足度
  - ・ 授業の満足度
  - ・ 課外活動の満足度
  - ・ 大学外の自主的活動等の満足度
  - ・ 大学生活の総合満足度
- ○ 教員との交流
- ○ AO入試で入学したことへの所感
- ○ T大学のAO入試制度に対する所感

満足度を聞く調査については，10点を最高点，0点を最低点として，それぞれの対象者が感じる満足度のスコアを聞いている。

所感を聞く調査については，AO入試で入学したことへの所感については，まず「よかった」「よくなかった」「どちらでもない」のいずれかを選択してもらい，「よくなかった」「どちらでもなかった」の場合，その理由を聞いている。また，T大学AO入試制度に対する所感については，自由に回答してもらい，それを「よいと思うところ」「よくないと思うところ（改善すべきと考えるところ）に分類して，まとめている。

3.1 大学生活等満足度について

3.1.1 授業の満足度

AO1期生の授業に対する満足度について，学部ごとの平均値の4年間の推移を表したものが，図1である。

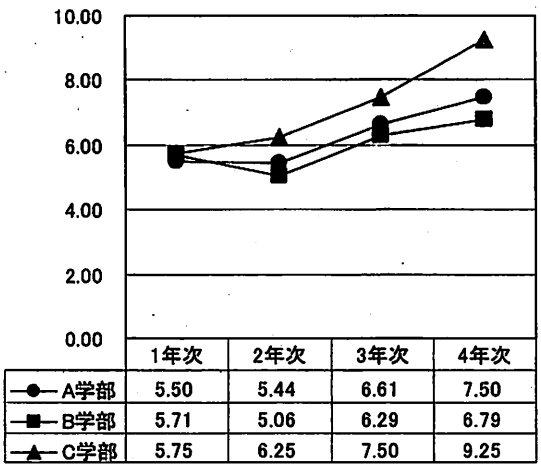


図1　授業の満足度

A学部，B学部においては，2年次に満足度が若干下がってはいるものの，全体的に見て満足度は学年が進行するに連れて，上昇していく傾向にあることがわかる。一般に言われるように，卒業研究が授業の中でも最も満足度が高いことが影響していると考えられる。ここで，4年次に卒業研究に着手した者だけ

を対象に，4年次の授業の満足度を見てみる。それを表したものが，次頁の表2である。この結果と，図1の結果を比較すると，卒業研究に着手した者は，より授業に高い満足度を示していることが看取できる。

表2　卒業研究着手者のみの授業の満足度

(人)

	A学部	B学部	C学部	合計
AO1 期生4年次	7.92	8.00	9.25	8.17

3.1.2 課外活動の満足度

まず，AO1 期生の課外活動参加率の4年間の推移を見る。学部ごとに分けて，その推移を表したものが，図2である。

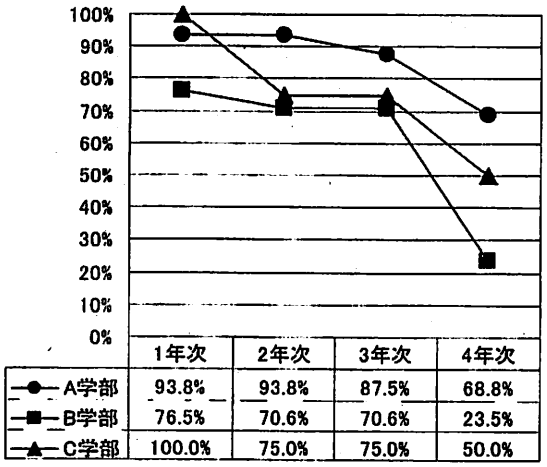


図2　課外活動参加率

図2を見ると，3年次あるいは4年次において，課外活動の参加率が下がっていることがわかる。この理由は，本学の課外活動の組織運営にあるが，大学祭中央実行委員始め一定数以上の課外活動組織が2年次のうちに引退する形式を取っており，また，他の課外活動組織もほとんどは3年終了時には引退する。このため，4年次に課外活動に参加しても，ほとんどの場合，OB として参加するだけであり，参加回数も大きく減っている。T 大学は，理系の学科が多く，3年次以降に課外活動に毎日参加できる学生は少なく，その実情に合わせた組織運営を取らざるを得ないことが理由である。

AO1 期生のうち，課外活動参加者の課外活動に対する満足度について，学部ごとの平均値の4年間の推移を見たものが，図3である。

課外活動の参加率は下っているが，課外活動の満足度は，全学部で6点以上のスコアであり，一定の満足を示していることがわかる。4年次で満足度が下がっているのは，「引退して参加する回数が減少したから，満足できない」との理由がほとんどであった。

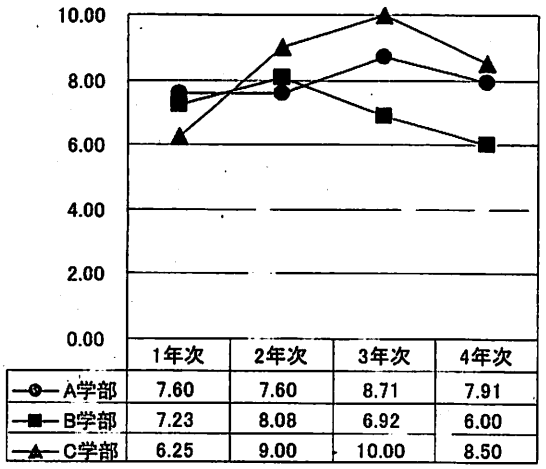


図3　課外活動の満足度

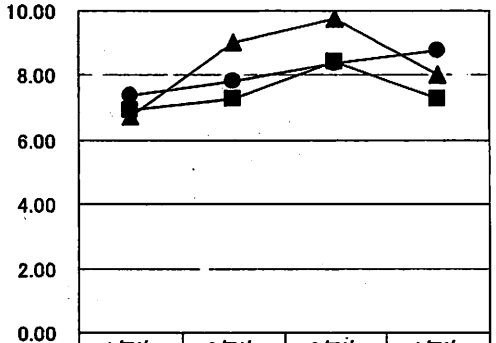
3.1.3 大学外の自主的活動等の満足度

大学外の自主的活動等について述べる。このカテゴリーに含むのは，大学の授業や課外活動に含まれない活動である。大学外の活動であっても，授業でのフィールドワークや卒論のための学外調査のようなものは含まない。大学や大学のサークル等と無関係なボランティア，旅行，自分自身で見つけたインターンシップ，友達との交遊，アルバイト等がこれらに含まれる。

これらの活動を総合した大学外の自主的活動等の満足度について，学部ごとの平均値の4年間の推移を表したものが，次頁の図4で

ある。図4をみると，A学部については学年が進行するごとに上昇する傾向にあるが，B学部，C学部については，3年次までは上昇傾向にあるが，4年次で若干下がる傾向にあるということがわかる。

本調査では，具体的な活動内容も併せて聞いているが，A学部については，卒業研究時期ではあっても，学外での自主的活動を継続するためのある程度の時間があることがわかった。一方で，B学部，C学部については，卒業研究に着手している者は研究室で多くの時間を過ごしており，卒業研究に着手していない者は，より一層授業に集中しなければならないため，3年次よりも自主的活動に当てる時間が少なく，活動内容が縮小していることがわかった。これが満足度に影響を与えているということがわかった。



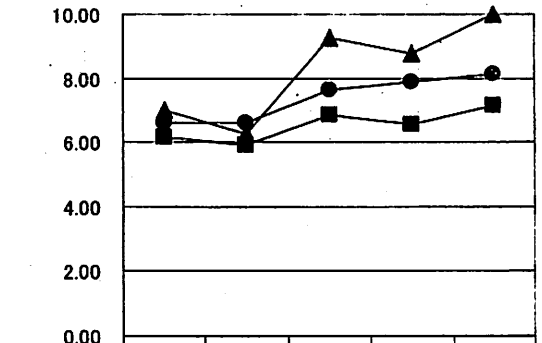
	1年次	2年次	3年次	4年次
A学部	7.38	7.81	8.38	8.75
B学部	6.94	7.29	8.41	7.26
C学部	6.75	9.00	9.75	8.00

図4　大学外の自主的活動等の満足度

3.1.4 大学生活の総合満足度

授業や課外活動，大学外の自主的活動等を全て含めた大学生活の総合満足度について，学部ごとの平均値の4年間の推移を見たものが，図5である。なお，図5には，4年次の結果の右側に，大学4年間を全て通した上での，大学生活の総合満足度を聞いた結果も掲載している。

図5を見ると，A学部については学年が進行するごとに満足度が上昇する傾向にあるが，B学部，C学部については，3年次までは学年が進行するとともに上昇傾向にあるが，4年次で若干下がる傾向にあるということがわかる。この傾向は，大学外の自主的活動等の満足度と同様の傾向である。また，課外活動の満足度では，全ての学部について3年次よりも4年次の方が，満足度が低かった。一方で授業の満足度は，学年が進行するにしたがって概ね上昇する傾向にある。これらのことを考え合わせると，大学生活の総合満足度には，授業以外の要因が影響していることがわかる。



	1年次	2年次	3年次	4年次	4年間
A学部	6.63	6.59	7.64	7.88	8.13
B学部	6.18	5.90	6.82	6.56	7.15
C学部	7.00	6.25	9.25	8.75	10.00

図5　大学生活の総合満足度

4年間を通した大学生活の総合満足度については，A学部8.13，B学部7.15，C学部10.00であり，全ての学部において，4年間のそれぞれ単年度の満足度よりも高いことがわかる。

ここで，4年間を通した大学生活の総合満足度について，4年間で卒業を果たせた者とそうではなかった者を比較する。それを表したものが次頁の表3である。

C学部については，調査分析対象者に卒業できない者がいなかったが，A学部，B学部のいずれの場合においても，卒業できる者の方ができない者よりも，満足度が高いことが

わかる。4 年間を通した大学の総合的な満足度の認知の仕方は，卒業の可否に大きく影響されることが看取される。

表 3　卒業の可否による大学生活の総合満足度

	卒業可	卒業不可
A 学部	8.23	7.67
B 学部	7.86	6.65
C 学部	10.00	該当者なし

3.2 教員との交流について

教員との交流について，「学内に親しい教員がいるかどうか」を聞いた結果を表したものが，図 6 である。

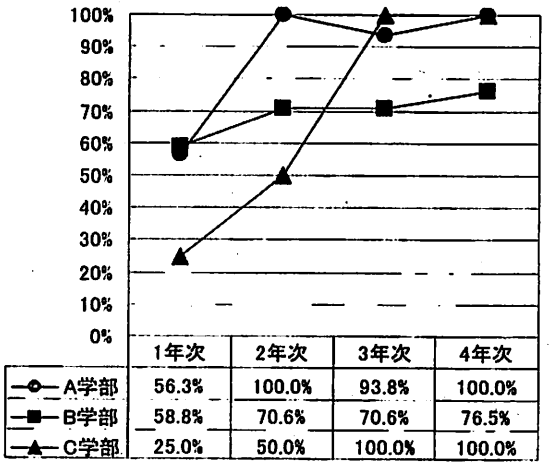


図 6　学内に親しい教員がいる

これを見ると，A 学部，C 学部については，3 年次で 90%以上の割合でいると回答し，4 年次では 100%がいると回答していることがわかる。一方で，B 学部は 3 年次で 70.6%，4 年次でも 76.5%と他の学部に比して低い。

また，学科に親しい教員がいるかどうかを聞いた結果を表したものが図 7 である[6]。これについても，A 学部，C 学部については，3 年次で 90%以上という高い割合で「いる」と回答しているのに対して，B 学部では 3 年次で 58.8%，4 年次で 76.5%と他の学部よりは低い。これについては卒業研究に着手していない学生がいることが原因と考えられるが，卒業研究のゼミナールに入る前の 3 年次においても他の 2 学部より低い結果となっている。

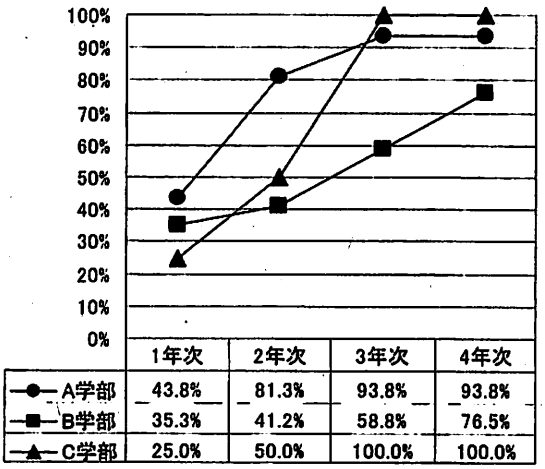


図 7　学科に親しい教員がいる

3.3 AO 入試への評価について

3.3.1 AO 入試で入学したことへの評価

AO1 期生に，「AO 入試で入学したことは，自分にとってよかったか」を聞いた結果を表したものが，表 4 である。

表 4　AO 入試での入学はよかったか

(37 人中)

回答＼学部	A	B	C	全体
よかった	15	13	3	31
どちらとも言えない	1	3	1	5
よくなかった	0	1	0	1

AO1 期生のうちほとんどの者は，「よかった」を回答しているが，「どちらとも言えない」「よくなかった」を回答する者もいた。「どちらとも言えない」「よくなかった」を回答した者には，その理由を聞いている。それを表したものが，次頁の表 5 である。

これを見ると，「どちらとも言えない」を回答した者の理由は，入学後は AO 入学者であることを意識しなかったという回答と，よいか悪いかの判断ができないというタイプの回

答であった。また，「よくなかった」の回答理由についても，表5の通りである。1名ではあるが，教員側の姿勢について言及している。

表5　「どちらとも言えない」「よくなかった理由」

「どちらとも言えない」の理由
・どんな入試で入ったかは，入学後は特に無関係だったから。(A学部) ・サークル中心の生活でAO入学者ということを意識することがなかったから。(B学部) ・入学後は，特にAO入学者であると意識することがなかったから（C学部） ・よいという印象も悪いという印象も特にないから。(B学部) ・よい面も悪い面もあり，はっきりとはわからない。(B学部)
「よくなかった」の理由
・学部の先生に，AO入学者を受け入れる姿勢がなかったと思うから。(B学部)

3.3.2 T大学AO入試制度への評価

T大学AO入制度への所感を聞き，その回答を「よいと思うところ」「よくないと思うところ（改善すべき点）」に分類してまとめたものが表6，表7である。なお，分析対象とした回答者は37名であるが，一人の回答者が「よいと思うところ」「よくないと思うところ」の両方を回答する場合等があり，回答数の合計は37を越えている。

約半数の者が，AO入学者同士の人間関係やAO入試という入試機会について，よいという評価をしている。また，それらに続いて，AO入学者の資質が，目的意識や意欲の旺盛さ，リーダーシップの発揮という点で優れていることを挙げている。これらはT大学AO入試のアドミッションポリシーに現れている資質であり，AO1期生自身の言わば自己評価ではあるが，それに即した人材がAO入試により入学していることを表している。

表6　AO入試制度のよいと思うところ（人）

第1位	AO入学者同士の人間関係（18）
回答例	・入学前から友人ができた ・個性の強い仲間ができた ・学科・サークルを超えた独特の人間関係ができた
第1位	AO入試という入試機会（18）
回答例	・チャンスが広がった ・意欲関心を十分に見てもらった ・自分の人生を深く考える機会をもらった ・学力不足をカバーできた
第3位	AO入学者の資質（10）
回答例	・目的意識・意欲が他の選抜の入学者より旺盛である ・リーダーシップがとれる ・社会で通用する人間性がある
第4位	早期に合格できること（2）
回答例	・気持ちに余裕を持って入学できた

表7　AO入試制度のよくないと思うところ（改善すべき点）（人）

第1位	成績に関する不安，劣等感（10）
回答例	・教員，周囲に成績が悪いという目で見られた ・周囲についていけるか心配だった
第2位	入学後のサポート体制の構築（9）
回答例	・プレスメントテストの実施とそれに併せた学習サポートが欲しかった ・入学後に悩み，目標を失った学生のサポートが必要である ・先生にAO入学者受け入れの姿勢がなかった
第2位	入試方法改善の必要性（9）
回答例	・学力テストは必要 ・英語のテストは必要 ・審査をもっと細かく丁寧にする ・話がうまいだけの受験生ではだめ
第4位	特定学部とAO入試の親和性（3）
回答例	・留年者が多い学部には合わないのではないか
第5位	早期に合格すること（2）
回答例	・合格が早すぎて入学までつい怠けた

一方で，表7を見ると，AO 入学者は入学後に学業に関する不安を抱えていることもわかった。それが，劣等感につながっている場合もあり，周囲から悪く思われているのではないかという不安が，入学後の精神的な負担になっていることがわかった。これが入学後のサポートが必要という回答や，選抜方法に学力に関する方法を導入した方がよいという回答につながっていると考えられる。なお，サポートについては，学習面だけではなく，AO 入試で入学したことで，入学後進路に悩んだ時，学科の教員にはそれを相談しにくいため，進路についてもサポートが欲しいとの回答も見られた。

4 おわりに

以上，面接調査を通じT大学AO1期生の4年間の学生生活を，満足度等の面から分析した。また，AO 入試で入学を果たし，4年間を過ごした本人である学生たちの視点から，AO 入試制度への所感を聞くことにより，当事者である彼ら自身の目から見た AO 入試制度のよい点や改善すべき点等について報告した。

AO 入試に対する評価については，昨今の新聞報道でも，大学側から見て，所期の目的を達成できなかった，あるいは，費用対効果が悪かったから廃止，縮小するという議論が多く見られる。各大学の入学後成績追跡調査や教員から見た評価には，この議論を支持する根拠が現れている場合もある。ただし，それらはある一面を見た評価でしかないかも知れず，どれだけの事実を収集した上での客観的な議論なのかに筆者らは疑問を持つ。加えて，AO 入学者を生み出しておきながら，当事者である彼ら自身の声に耳を傾けようとせずに，一方的にネガティブに評価し，その評価が報道等に大きく現れた際の AO 入学者自身やその親族等関係者に与える影響をどのように考えているのかには，さらに疑問を持つ。大学が人材育成の場であるならば，AO 入学者が大学卒業後に社会で受ける評価も当然ながら，入試制度評価に加えられるべきであろう。AO 入試の評価を決めるには，まだ調査すべき様々な事実があるのではないか。

注

1) T 大学は，中四国地方に位置する地方国立大学法人である。
2) 調査時期の設定は，前年度までに実施している調査と時期を一致させるためである。調査は，毎年度末に実施している。また，面接と電話インタビューの回答の質の違いについて，特に感じなかった。これは，調査者を1名に固定した調査であること，調査者がAO1期生と4年間コミュニケーションを継続しており，一定以上の親交関係を構築できていたことが理由と考えられる。
3) C 学部の1学科は分析対象外とした。他の全ての学科が，高校生，過年度卒業者を対象とした AO 入試であることに対して，この学科は大学既卒者（含大学卒業見込み者）を対象とした AO 入試であり，データの質が異なると予測したためである。
4) 分析対象外とした3名のうち1名は2年後期に進路変更を理由に退学している。調査者とは親交がありインタビュー可能であるが，本調査の趣旨と外れるため対象外とした。残りの2名については，3年次までは調査協力していたが，4年次調査については協力依頼のメールに対し返信がなかった。3年次までの調査については，40人分の調査データが存在したが，本稿は4年間の比較であるため，この3名については分析対象外とした。
5) 全数調査ではあるが，C 学部の対象者は4名のみであり，分析データとして用いるには僅少である。C 学部については，本稿での分析結果が，常に安定して得られるもの

ではないと考えられるため，注意が必要である。

なお，A学部は文系学部，B学部及びC学部は理系学部である。

6) 学科に親しい教員がいる場合は，当然ながら学内に親しい教員がいることになるため，図7の数値は，図6の数値を超えない。

参考文献

福島真司,2007,「AO入学者の視点　―入学後AO入学者全員面接調査から―」『大学入試研究ジャーナル』第17号,23-31

中村肖三・福島真司,2006,「進化するAO入試―“青い鳥”を求めて―」『大学入試研究ジャーナル』第16号,83-88